

幼児教育者とユーモア

倉橋惣三

やさしさといひ、ゆきとどくことといひ、殊に、まじめさにおいて、申し分のないといわれる先生で、おしいかな一點足りないと思わせることがある。ユーモアのない人である。

ユーモアと、イギリスの言葉のままを持ち出すのはとも思われるが、どうもびつたりしたいいあらわし方がむつかしい。滑稽、諧謔と書いては、字がかたいばかりか色が濃すぎゝる。おどけ、ふざけといへば、わざとらしさが感じられ、ひょうきん、とぼけなどという、性分の傾向のように響く。もつと淡く、どこまでも自然に、性分というよりは気分といつた方がいひ氣の軽さである。

かういふ軽い気分といつたことは、人格とか、教育者としての本質とかに、かれこれ取り上げられる程のことではないかもしれない。しかし、教育者^{殊に}にも幼児の教育者は、先生であると共に幼児のともだちであるという點からは、幼児の世界の一つの主な特質であるユーモラスな點にも、一味相通するところがほしい。その全く缺けている先生は、幼児に

とつて、有り難い先生であつても、うれしい先生でなく、たよりになる先生ではあつても、打ちとけられる先生ではないかもしれない。子どもがそういつたら生意氣だが、味のない先生かもしれない。

おもしろい先生というのは語弊がある。殊に、つとめておもしろい先生にならうとしたりすると、いやみになる。悪ふざけで幼児さまの御機嫌をとつたり、笑わせるために、幼児をくすぐつたりするのは、ひつっこいしわざでもある。子どもの人氣をとろうとする遊び相手や、子どものかつさいを拍そうとする話し手などに、そういう小細工の見えすくのは下品であり、卑しむべきである。しかし、そんな、わざとすることではなく、その人の氣分の軽やかさから、ふと出るユーモラスな口調なり動作なりが、子どもを喜ばせ、少くも、子どもの心をらくにさせることは、幼児の友だちになれる一つの資格である。萬事がきちりきちようめん、常住かみしもをつけたような態度だけでは、根がユーモラスな幼児が近づき

難いこともないでなからう。

その日の健康加減などで、重くるしい気分、何か特別の事情でもあつて、むすぼれた気分、それは、誰にでもあり勝ちなことである。おとな同志では、無理もないと思ひ、同情もされるのであるが、幼児の傍に在るものとしては、それも好ましくない。憂鬱な顔、澁いしかめつら、幼児の友としては、禁物でもあり、ゆるし難いことでもある。ユーモアの缺けてゐるといふのは、そうしたほどこでは無いが、いつもいつも、餘りにきまじめに四角四面過ぎ、餘りにまつすぐに直線過ぎ、まるみもなく、ゆるみもないのでは、幼児にとつて氣苦しかろう。その心の奥にはやわらかみもあり、その底には温みをもつていても、木でこしらえた無表情の面のようには、幼児には受けとられまい。謂わば、餘りに、そつけないのである。幼児が親しんでゆくことが出来ないうころか、近づいてもゆけなかつたりする。先生の方としていえば、幼児をひきよせることも、なすませることも出来にくいことになる。

幼児の心をひきよせなくつたつて、親切をつくし、人格的感化を興えさせればいゝと、ひきしまつた口で、その人はいつでもあろう。なすませたりなんかしては、人の師たる威厳をそこなうと、あお白の顔で、その人は思うでもあらう。が、それでは、子どもを愛し、教えることは出来るとして、子どもと一つにはなれない。一つに溶けあわなくては、

眞の教育も出来ないのであろうし、愛するといつても、一方的に終らないと限らない。

子どもと一つになれるためには、先生の方に、子どもの心と相通するところがなくてはならない。たいらにいえば、どこかに、子どもらしいところがなくてはならない。勿論、どこかにである。すっかり子どもと同じというのではない。先生は先生であるが、一脈、子どもに似た點をもち、子どもらしい面もあらねばならないのである。子どもらしいというのがお氣にいらぬならば、子どもに似るといってよい。それがいよゝ失禮に聞えるなら、重心といつてよい。童心といふと、大層神聖なものに解されることもある。漢語では純眞、英語ではインノセント、それに相違ない。フォイエルバッハはインノセントをほんの幼い心と、高い聖者の心との二つに分けて、高い方は神の心の眞純に通ずるものとした。人が童心の貴さというときには、その高い方の意味が主になつてゐるのであろう。しかし、そういう高い考え方は暫く別として、子どもの心にあるがまゝに感ぜられるものは、その氣輕さである。浮き浮きしてゐるといふ譯ではないが、沈んだ重さではない。陽氣といつては、はしやぎ過ぎるが、暗い陰氣ではない。げら／＼笑つてはいけないが、すぐにでも笑い出そうとしてゐる。舞い狂つてはいけないが、すぐにでも踊り出そうとしてゐる。少くも、なんでもが動きかけて呉れるのを待ち、笑ひかけて呉れるのを待つてゐる。餘りに均勢のとれ過ぎた靜、しかつめらしい整は、究屈である。氣づまりで

さえる。靜の中にも一味の動、整の中にもふとしたくすれの氣輕さ。——その氣輕さこそ童心であり、ユーモリスト幼兒の心である。従つて、その氣輕さ、そのユーモアを全く缺いては、幼兒の心と一つになれぬ。

ユーモアというと、却つて事々しくもなるが、木の葉のひら／＼散るのもユーモアである。石ころのころ／＼ころがるのもユーモアである。窓の戸のきちんとあわないのもユーモアである。天井の雨漏りのしみもユーモアである。端麗な先生が、遊戯の後で、感興のまま、象のおかしな歩き振りをするのユーモアである。謹嚴な先生が、お話の中で、興の乗つたまゝ、おもしろい猿の鳴きまねをするのもユーモアである。それも、しくみたくらんだ悪ふざけではなしに、子どもに圍まれてゐる快い氣の輕さに、端麗がちよつとくすれ、謹嚴がちよつぱりほどけて、自分でも笑ひこけるところに、ユーモアのしん／＼たる妙味がある。子どもらの喜びや察すべきであり、その先生にとつても、極めて幸福な一瞬である。時とすると、そんなことから、先生が子ども心に結びつき得たり、子どもが先生を大好きになつたりすることも稀でない。但し、策略では勿論ない。人氣とりなんかでは全くない。そんな毒氣が少しでもあつたら、それは決してユーモアといえるものでもなく、子どもを害するものである。

氣の輕さと共に、ユーモアのもう一つの本質は、心もちの

ゆとりである。小さい水には小波もたゝない。廣い海には波の戯れがある。狭い室内では息がつかまる。廣い野原では氣のびのびする。熱心は貴いが、集注に過ぎては肩がこる。まごころは一層貴いが、一筋過ぎては足がすくむ。餘裕といつて熱心が缺け、平氣といつてまごころが足りないのは許せない。しかも、ゆとりのある心は、肩をよせて見つめるばかりでなく、せか／＼と氣をいらだたせることなく、いつでも、どんなときでも、ひろ／＼と、ゆつたりした氣分を失わなからぬ。いぢぢな心のあいまに一寸した氣散じのすきも残れば、むき、眞正面の眞剣の間にも、せき込まない餘裕が保たれるところにこそ、自分の心をゆるめ、人の心をも解くユーモアのゆとりがあるのである。

子どもらの心が、ゆとりの天地に生きてゐるのは彼等の恵まれた幸福であるが、それを取りかこむ我れらの心の、なんと常にゆとりの少ないことであらう。そのゆとりのない顔を見て、子どもらは、どんなにかたくるしい思いのすることであらう。そのゆとりのない聲を聞いて、どんなにぎごちなくも感ずることであらう。おとなは、そのかたくななを嚴肅と呼び、そのぎごちなさを嚴格と稱えて、教育の規としたりするが、教育そのものは嚴なるものであるとしても、その教育で心が一ぱいになりきつて、すきも餘裕も残り保たれないのは、われらの心の狭さからであり小ささからである。ユーモアの名において、ふざけよ、おどけよ、じようだんをいえというのではない。たゞ、心にいつもゆとりを存していたい

と思うのである。このゆとりの中に、子どもらの無邪氣ないたすらも許されるであろうし、軽いからかいで子どもを喜ばすことも出来るであろうし、子どもといつしよに、うつとりしていることも出来るであろうし、子どもと共に心から興ずることも出来るであろう。こんなことは、教育として格別たしいしたことでもないかも知れない。しかし、子どもには、それが、どんなにうれいしことであろう。先生は、えらい人であると共に、ありがたい人であると共に、どこか自分達に似たところのある人だと思ふであろう。わたしの先生だとも感ずるのである。

根がきまじめな自然に、案外ユーモアの多いのも面白い。嚴かな杉木立の奥に、ぶらりとぶらさがつてゐる紅いからすうり、足も躡み込めない夏草の茂みの間に、ちらり、そつとのぞく白いひるがおの花、がさ／＼と鳴る枯落葉のかけに、かくれたつもりで頭を出してゐる圓いきのこ、ほ／＼ましいいユーモアである。人間にも、そういうところをもつ人がある。一塵をとどめず掃きよめた庭に、二ひら三ひら葉を散らしておくのが風雅だといつたりするのは、わざとらしい、いやみな茶氣であるが、掃いて掃いてゐる後から後から、小さな落葉がいたずららしくついて来るのは、かわいらしいユーモアであり、鏡の前に凝つた化粧のかきぼくろは、みえすいたおしやれであるが、何げなく笑うと出来る片えくぼは、愛くるしいユーモアである。そこに自然の愛情があり、人間の愛嬌もある。

愛嬌は、それがすぐに、好意、親切、といったものではないからうが、よしみを感じさせるものであり、親しみを起させるものである。降りしきる雪は冷い程白いが、雨戸のすきまに細く吹き込む時、粉雪、冴えきる月はすこい程蒼いが、板戸のふし孔をのぞき込むそれには誰れも、よしみを感じ、親しみをもたずにはいられない。先生の人格は、屢々、雪の如くに純に、月の如くに清い。その先生に、粉雪の戯れ、漏光の戯れがあつても、その感嚴を損する譯でなく、却つて幼い心によしみを感じさせ、親しみをもたせることも屢々であらう。たゞに、野一面の純白、一天隈なき清光だけであつては、その美は幼い子らを近づかしめないかも知れない。圓滿の人格、崇高の人格に、一點小さいな軽い、愛嬌のまじる時、幼い子らは、どんなにか心安く、その傍に近よらせて貰えるであらう。ユーモアはつまり、つくらない小さい愛嬌である。念のため、もう一度いう。どこまでも、つくらない小さい愛嬌である。つくり愛嬌、大げさな愛嬌は、ユーモアでないのみでなく、ユーモアの反對である。つくり愛嬌は、甘過ぎる菓子のように、幼児の心の味覺をあらす。大げさな愛嬌は、高過ぎる太鼓のように幼児の心の聽覺をおどかす。どことないところ、そうとしたところにこそ、眞のユーモアがあるのである。その意味で、ユーモアも亦一つのまことである。子どものユーモアが常にそうである如く、おとなのユーモアも常にそうでなければならぬ。自然のユーモアが常にそうである如く。